

ミオヤの光

無碍の巻

目次

萬有の歸趣……………(一)

無碍光……………(二)

正義……………(一八)

神聖……………(三五)

恩寵……………(四三)

萬有の歸趣

一大精神。天地萬物の本源凡聖十界の根底の一大精神を法身如來藏性と號けらる。宇宙萬物を統一綜合る精神態なれば總該萬有心とも稱します。此一大精神に全知全能の徳用あり。天則秩序を整齊るは即ち全知の妙用にて萬物を生活々動せるものは全能の作用である。

これを二面に見て實體本性の方は如來の自體にて永恒不變の現される。吾人が見る世界の方面は常に轉變極りないのである。一大精神を根底とする個々の精神態を二つに分て凡心聖心と爲し、凡は無明態にて聖は覺醒たる心靈である。凡心に善と惡となり、何れも三等に分ちて三惡道と三善道と合せて六道と申します。聖は已に覺醒て靈格として一大精神と冥合して個人我を離れて一大真我を我とするのである。斯凡聖

一

十界は本一大心より發現たるものとすれば人の精神の根底は玄深である。

一心十界を造る。一大精神の分れる個々の精神には理に十界を具し事に十界を造ること、人の心は十界の中何れにも成り得べき性能を有して、而して因縁の關係によりて善惡迷悟の十界を造り出すことは、喩へば巧なる畫師が天人や鬼を描き現はすよなのである。一心が善惡に分る規定につきましては形の方と業識の兩方面あれども先づ形の方を説明せば、白紙のような本性が何によりて善惡に變化すといふのに本性が父母の遺傳の素質の薰染を受ると、また妊娠中の母の心持方のいかは、大に其子の素質に關係を及ぼすのである。故に父母たる者惡しき心を懐くまじきもの其子にまで惡質を遺す恐れあればである。夫より出生後には少年の家庭學校社會の教育其他の周圍の事情は其人を善惡に鍍化資縁である。殊には其人々の一生の業作の習慣性が鞏固に決定たるを業識に於て三惡三善の六道と四聖との結果を成すのである。カントが、天國は理論では有無を證明できないが實行の結果はなければならぬと云と同じく、地獄や天堂は之を理に證することは能はざるも人の生涯の善惡の業によりて固りたる性格と其業力の自然は六道四聖なければならぬ。さて此凡聖十界は本一心の造る所と申すのである。否現に各個々の情操と其行爲は六道が瞭然と證明されるではないか。

地獄。闇黒の中に於て其身は倒まに懸り熾然猛火に焚焼れ劇苦に間隙なきものは地獄と申す。何なる業力により斯る苦惱を感ずるとならば、一類の人あり唯惡の方の發達し良心滅し惡の習申性が惡弊症に陥り、天理に逆ひ人道に戻り殘忍醒薄極惡の所作人をして戰慄せしむ。上にありて般の糾が己が肉の快樂の爲に民を塗炭に苦しめしめしが如きより下にありては盜跡が數多の人の幸福を肉慾の犠牲となせし如きを地獄と申します。斯の如きの我惡の習慣たる業識と惡の業力が感ずる處と申します。

餓鬼。此に二種あり。一、有財餓鬼とは眼前に食物あるも其喉小くして食すること能はず、飢渴の苦甚だしきものであります。世に我慾の病的に陥り山の如くに財を

三

積めども之を公益に施すこと能はず我慾を充しめんが爲に他に害を與へ我慾の餓鬼根性のかたまりなる業識が感ずる心を云ひます。

無財餓鬼とは一切の食物が見ることさへ能はずして常に飢渴の苦を受くるもの世に類の輩あり縦逸にして活業を營まず飲食に耽り色に荒み奢淫放逸肉慾の奴隸なるあり凡て感覺の欲は一定の快樂が屢すれば習慣となり必需となりついに病的となり肉慾の餓鬼となりよしや死すとも病的食色慾等の禁止られぬと云ふまでに肉慾の病的餓鬼に墮たる病的があります。

畜生。いか成る人が是畜生の業識と申すとなれば、人生は營養生殖の外に目的を知らず、道徳倫理もなく人と交るにも仁恕もなく、義務感情もなく横的情操横的行爲實に形こそは人類なるも情操と行爲動物に異ならず、世に所謂人面獸心なるものなり。暴行虎の如きあり、淫洗禽に類するあり、既に人類に進化したる甲斐なく自ら性を畜生に墮れて安するは寔に淺ましいではないか。

上の三類をば惡の性格と行爲の等によりて三等に分ちて之を三惡道と名づく。無明の中に善なるもの三品あり。下品なるものは修羅道と云ふ人にして修羅的性格なるものとは世に云はゆる天狗根性傲慢を以て其全精神を支配せるなり。經に「讒賊鬪亂誠實なく尊貴自大にして己道ありと謂ふて横に威勢を行じ人を侵易す自ら擧高して人の敬難を欲し天道を畏れず實に降伏すべきこと難し。」偽善偽徳を以て名を釣り權威を追ひ求め傲慢の爲めの故に心に諍闘休止なく斯る性格を修羅業識と名づく。

人道。人には仁義の常あり君臣父子の經綸あり。同情仁恕を以て相互に社交を濃にし良心あり義務感情あり個人は國家の一員なりとて其職務を重じ人にして人格を全ふし人たるの義務を盡し天職を全ふするは即ちこれ眞の人なり全く人たるの義務を盡すときは人たるの權利失ふことなく即ち是因果の理であります。

天道。天は公明正大博愛無私萬物を一仁の下に統む。世に仁人君子あり國家人類の爲に己を犠牲にして世に幸福を施せるもの皇國の仁徳帝の如き支那にては堯舜禹王の

四

六

類全く國民を子とし愛撫し玉ひたること是ら宜しく天道に配すべし。或は電氣また蒸氣等發明して天の機能を人類に紹介せしもの、如きは天使の作用なり。また楠公、清磨の如き國の神と祀らるる如きは人類の常倫に越へたる天道に屬すべきであります。已上三類を善の行爲の三等にして三善道と申します。

四聖。聖心靈已に開發し宇宙心靈と冥合し其目的に協力聖靈態、聖と云ふ即ち靈格なり。

聲聞。先覺者の軌則に隨つて得道するものを聲聞と云ふ。四諦とは苦集滅道とて苦とは生死は業に縛れたるの苦なり、この本は煩惱である。煩惱の本は即ち主我である我を無にせば無我は宇宙一心靈と一體になりて眞如理と冥合して即ち天地同根となりたれば自然に神通を得て遠隔の地を見聞し他人の心を知り未來を豫言することを得。自心と宇宙の内容と一致してあれば心靈は無爲涅槃界に逍遙して自由である。然して肉體盡る時は一如の眞理に歸入す。釋尊の弟子舍利弗目連の如き聖者は悉くこれに攝す。

緣覺。また獨覺とも云ふ獨り無師自然に悟る聖者である。十二因縁を觀して生死の源を悟り涅槃を得る。生死の源は無明である。之を覺醒すれば業を失ふ。業力を失へば生を受ける勢力なし。生せざれば老病死なし、已に生死を脱すれば宇宙と一體である。涅槃常樂の都である。之を緣覺と云ふ。今古哲學者の如きは萬物の原因結果の利を究む、即ち緣覺の學者といふべし。聲縁の二聖は獨り自己の解脱を期して利化を兼る。

菩薩。智と仁兼ね備りて自ら誓て人類を救ふ聖者なり。智慧ありて宇宙玄妙の理を契悟、仁愛ありて宇宙的同情を以て人類を擔うて度するに衆生の苦を我苦とし人類を度せずは我も成佛せじとの情操と實行となり。

釋尊の未だ正覺得ざりし時、またキリスト、マホメットの類、孔子、ソクラテースの如き善導、達磨の類吾國の空海源空等の聖者は悉く菩薩とす。すべて心靈更生

五

七

して永恒の生命となりて人類を誘導す。勇健なる仁人はみな之に屬す。

佛陀。三身あり。此世界に出で、人格を以て人類を教化度脱し玉ひしは應身と云ふ。報身とは宇宙の本質の内面に在りて智慧遍く十方を照して人類の心靈を開發する徳を有し自體は常寂光土に在つて陀の爲に相好圓滿の至美の莊嚴を現し、法身としては始めに示したる宇宙の實體である。故に如來天地萬有の實體にして亦た最終目的の歸趣する處の體なり。此を離れて萬物一も有ることなし。

結勸。宇宙實體本性は如來の中に於て無明で覺醒ざる者は六道に流轉して生死に没する心靈覺醒する時は宇宙の内容と冥合し涅槃界に安立す。前三聖は未だ究竟の成佛にあらず。只獨り佛陀のみ全く宇宙同一本體として人類を度救の作用の爲に人格を現したのである。

宗教の定義は何の點に有るかと云はゞ外でない、各自己の精神と其大源なる宇宙精神との調和するにあり。自己が小天地の小我ならば宇宙精神は大我である。此大我と小我との致一融合して大我の目的を我目的として終局に向て力行するのが宗教の真理である。其大我の眞面目を悟りしが即ち教祖釋尊である。否悟りしのみでなく全く大我の化現である。

釋尊は其大我をさして「アミダ」と號くと曰へり。譯すれば無限の光を以て空間に偏く無限の壽を以て時間に滿るの義である。即ち宇宙の眞性に在る大我と小我を一つにして調和することを得べきや、曰く、佛教にそれが方法多しと雖も最も簡易にして完全の調和の法を示せるものは佛陀三昧なり。佛陀三昧とは大我なるアミダ如來を聖名によりて聖旨の我に現はれんことを祈り、専ら至心に如來を念ずるとき、早晚心靈覺醒して、やがて心靈開發して自心源なる天真自性を顯現し、尙進みて内容に深秘の事相なる金銀摩尼寶珠の宮殿七寶莊嚴の靈界に相好圓滿の如來に智惠神聖正義等の萬徳を以て嚴臨し玉ふことを啓示せらる。こゝに至つて完全たる宗教の關係を成したのである。

無礙光

解脱の徳（處として融化せざるなき）

頌に、如來無礙の光明は、無上菩提の態にて、世の約束を解脱ては、眞我の自由を得せしめぬ。

上の二句は、無礙光の徳相を標し、次の二句は、大用をあぐ。無礙とは、消極的には人の宗教的性に適せざる性能、主我幸福及利己的欲望等を、積極的には如來の聖意に靈化し、眞理の目的に協力して行動すること。

無上菩提は宇宙大道即ち宇宙心靈には萬物を如理に向上し、道徳秩序ありて萬有を如實の道に準率する理性の存在なり。之を阿耨菩提と名づく。是宇宙最高實在を中心とする道徳律なり。

世の約束とは、人は天然なるは朴質にして靈性未だ開發せざる程は、世界の相待に

規定せられ、機制我のために眩惑せられて、宇宙最高の目的に参すること能はず。之を解脱するは消極的方面にして最終目的に攝取して協力せしむるは積極的方面なりと爲す。

無碍光の性質を論せば、如來の一切慧と一切能、無碍光としての知能は即ち純粹理性を照す。即ち理論的の性格にして無碍光としての一切智能は實行的を照す處の光即ち倫理の光明なり。

如來一切慧と能との徳性をもて規律に順ふて之に參與する處の心靈を開發し惡質を脱却し終局目的に協力せしめて無上菩提を得せしむる勢力なり。

宇宙大道

如來の性能なる宇宙大道に二面ありて、斯大道が天則秩序としては萬物を開展し攝理する處の天命的性に萬物の秩序を統一し攝理する處の理性として存在し、天則的に世界道徳秩序の理に隨つて萬物の生命は向上發達す。

自然界の發達は有機界を現化し、有機界の中に植物は動物を現化し、動物生命の向上は人類の心靈的生命を現化し、地球上に現れたるものうち人類の心靈的生命を最高とす。天則秩序の自然界を開展向上發達することは心靈的生命。心靈生活は最終の真理。眞善の目的に到達せしめんための方便なりと云はざるべからず。

如來は宇宙廣大なる設備を以て萬物を生産し擔保し統一し攝理す。要するに萬物の生命に成佛を得らるべき性能を賦與しまたこの目的たる靈性を顯動態にせんがために、天則的に生命を向上發達せしめ、萬物の根底は法身を實體として靈性を本能に具するは、之を如來の性起と云ふ。また一方には終局目的の理性を顯さんが爲には、法界緣起として報應等の恩寵と現はれて一切を攝取す。

世界性と人性とは自ら解脱する能はず

世界性とは因縁約束即ち相待に規定せらるる此世界萬物は自然に規定せられ因果に約束せられて而も自ら道徳的自由を得ず。即ち自由意志なき處、故に惡即ち不道徳なるは世界の自然なりと云ふことを得べし。

人は自然と同じく自然の産物なる人にして人の精神的過程は因果律に支配せらる。身體及精神共に生理過程は自然律と因果律に規定せらる。同一の性質構造を有する有機體に同一の刺激を受るときは、全く同一に反動す。

身體及精神及性質等の遺傳も因果律なり。生の原因に於て、父母の所生にして自己の選擇によりて若しは男若しは女と生れ來りしにあらず。身體氣質性慾感官知力を遺傳し先天的にまた後天には其家庭教育社會の風俗習慣時代思潮の爲に規定せられ、先天の性質後天の周圍の事情に鎔化せらる。故に人は自然律により因果に規定せらるる世界性なり。

自然及び因果律の世界的産物に生理機制を實に我と執し、機制は肉慾我慾、我に自由を與へず、自ら生理の慾に自己を肉慾の奴隸とし道徳の罪人とす。

天然の人は利己本能の幸福の本能に加ゆるに氣質性分等の機制に制限せられて自由を得ずして、自ら云ふ、性は自己の能くせざる處と。

世間の道徳の規定たる良心と名づくるものも、其時代と土地の風俗習慣に規定せられたるものなれば、良心なるものは規定によりて轉變するが故に、全く道徳の意志の根據とするに足らず。

他の意志は或る動機に隨つて發動し他の事情或は風俗のために規定せられたるものにして、眞の道徳の根據にあらず。

世界的相待的なる善惡は、世界の根底に立つが故に、世間の毀譽褒貶によりて動されざるを得ず、維摩經に、善不善爲二、若不超善不善、入三無相際、而通達者、是爲三不二門。亦罪と福を二と爲す若し罪性と福と異なること無しと違すれば不二門と爲す。

相待なるものは、善の反對は悪なれば、善も根元的善と云ふ可からず。或事情の爲には亦悪と變ず。故に絶對的道德の根底に立たんとせば、本より機制我は根本的悪なるものを認定し、世界相待規定なる意志は、善の如くなるも轉變極りなければ、未だ眞の道德の根底にあらず。また世界性とし因果に規定せられたる習慣性もまた、自ら解脱すること能はずして、人は煩惱の奴隷となり、相待規定の世界に依屬し自ら解脱を得ず。

然るに此世界なるものは、如來藏自中存するも、吾人が因果に規定せらるるは是よりは高等なる如來眞實の目的に達すべき方便有餘土として眞に價値あり。現世界は本如來の本體中にして、人生の最根底の靈性と世界の根底たる靈體とは同一本質にして如來なり。

如來中の世界及び自己なれば、機制我は最深の奥より一大眞我を發見し、如來の聖意の大海より眞の實現とし、如來の目的に隨順して行動するを無碍自由と云ふ。人は如來眞我の中の心靈我として始めて自由を得べし。

無碍光によりて解脱

人の天性、機制我は生理の慾即ち肉の我なれば、利己幸福の外に他を顧みるの暇なし。世界的我は世界自己及び世界の最根底たる一大眞我を發見し、此眞我は即ち無碍光明。吾人の心靈は此光明によりて絶對なる道德の根底とす。一大眞我の中なる我としては、宇宙間に輝き、如來の神聖なる智光長へに照し無限の慈悲愛に同化せられ、此根底に受る心靈は不動の道德心の源泉にして、いか成る境遇にも不退轉なり。

如來の無限なる愛の源泉より湧出づる愛は、萬人に交通し、如來大我の中に、一切の生物と根底を同うし、彼我の差別なく、是非善惡を超越して絶對なる如來の愛によりて相互に融合し、萬物と我と一體にして如來によりて相互に相愛し、また如來の神

聖なる光明は長しへに我心靈を照し、自律的に道德の規定となり、如來の正義は吾人の心靈には主我を捨て公正なる如來の聖意の中に行動すべき力を與へ、個人目的を超えて如來の最終目的に協力せしむるに無碍自由を得しむ。

客觀的正義

正義は消極的には如來の聖意に背く處の素質を脱し、積極には如來の目的即ち無上道德に協力して活動し、消極には煩惱を斷ず。

宇宙大道に正義の性能存在し、之に乖く者は永く眞理に捨てられ、此大法に離れては長く活べからず。此大法に加はるものは共に向上し、高尚なる理想拔群なる勇氣、宇宙の間情、如來の目的を自己の目的として道德無限の力を得て活動す、如來の源泉より湧出る英氣存すればなり。

絶對的の大道の正義は、客觀的道德と現すれば社會制度の道德制裁となる。

自然なる世界状態には如來の理性を根底とするも、自然に世界性情の垢質存するを以て、この垢質の中より眞善の安寧國を建設せんが爲には、道德態の選擇的正義の性能なるべからず。選擇とは客觀界に有る處の兇惡を捨て妙善を選択するの謂なり。如來選擇本願力を以て淨佛國土を建設すとは、宇宙大道に含著する正義の勢力即ち終局目的の眞善美の靈界を顯はすべき理性を具體的に説明したるに外ならず。正義は兇惡の國土より妙善の淨土を選択する勢力なれば、此選擇的正義は如實の判斷を以て取捨に於て憚ることなく、選擇的正義を捨て妙善の淨土を顯現するに縁なし。

自然界に現るる正義

宇宙大道の正義の勢力は自然界の中にも常に現はれあるを見ん。見よ。自然界は大道の正義を以て萬物を律す。大道は自然界を向上し終局目的の手段たる世界として此向上の目的に率ふ者は益々發達し、進化に努力し爾らざる者は亡ぶ。天體の星宿が渾

沌の状態よりして自己の性能を遂んとして向上に努力するものは圓滿に成就して恒星となりまた遊星となり、軌道に順つて運行し能く萬物を化育し完全たる星界とし道徳秩序の世界となり、無数の聖賢を出す。

此勢力に順はざるものは渾沌の状態より圓滿に達する能はず、性を遂る能はずして遂に分散し消滅す。

能く大道の勢に順ふものは益々進化し整然たる秩序により善美赫々として光を放つ。

視よ選擇正義は自然界にも歴然として現はれたり。然るに自然界は此よりは高等なる心靈界の終局目的ある世界としての存在なれば尙進んで真理の目的なる心靈界の眞善美は此自然界の中に於てまた一層高等なる選擇本願の正義の勢能を有す。

世界に含蓄せる正義

選擇本願は國土の羅刹人天の善惡に於てす、客觀の方の不道徳不正義は目的には有べからざるものとして選擇せらる。

選擇本願力は世界を超えたる彼岸にのみ行はると謂ふなかれ。正義は世界に行はる。正と善とは世に賞揚せられ、邪と惡とは人に嫌忌せらる。

善は明にして惡は闇なり。惡は消極にして積極的の性なきなり。善は向上し發達すべき性を有し、惡は遂に亡べく没すべき性なり。

惡は善に對して障礙を加ふるも自己の目的にあらず、ただ善を飾る器具に過ぎず。釋尊の本生經にかの提要調達が生々に於て釋尊の正善に向て沮害を加へたるも歸する處還つて佛陀の正善を裝飾せる金箔となるのみ。

不道徳の盛なる社會には私慾を以て相互に殘害し相呑噉して共に苦惱するは社會が相方に與へらるる罰なりと云ふべし。

賢聖世に出て衆生を救濟し道徳に増進する道を人類に與へ、此大法の爲に力を竭す

は空く宇宙大道如來の權化と云ふべし。

心變の生活なる人類を養ふべき方便士なれば此の世界には益々向上のために邪と惡とは悉く淘汰せられ選擇せられ、大道に合ふものは選擇攝取せられ、進化の適者生存の理によりて益々健全に進み行くを見る。之に適せざるものは亡ぶ。是自然淘汰の法なり。

世に不義にして富み不道徳にして貴きものあるはそは、唯肉の上のみの幸福にして心靈は少しも靈福を感ぜざるなり。世に正義の存する所以は、苟しくも理性を具ふるものとして善を稱揚せざるなく、惡を排斥せざるなし。さればとて善人が有形の幸福を得惡人は不幸なりと云ふにあらず。善は榮ふべき性、惡は亡ぶべき性なるを云ふ。

また人についても惡は一時僥倖の爲に一時隆なるも必ず亡ぶべき性を有す。看よ盜跖が惡を以て僥倖の生涯を送りしも數千年の今日にして衆人悉く彼を責む。

人が正善を稱揚し邪惡を嫌忌するは自然の理にして、惡は抽捨せられ善は選取せらるべき理法が客觀界に行はるるにあらずや。如來の正義は世に行はる。惡徳の社會は闇黒にして正善なるは光明の歴史として顯はる。

現世界は方便士

若し果して世界は如來の正義選擇本願によりて淨土を顯現するとならば、世界は全く善美の莊嚴を以て充さるべきに現に世界は惡に充さるゝにはあらずや。云はく、如來正義、現世界は方便有餘士として價值あり。方便士とは世界はこれよりは高等なる心靈界に進むべき階級としての世界なれば、いかにして目的に進入すべきと云ふに、即ち如來は正義を以て選擇す。善と惡とは選擇し妙と善とを選取す。方便士に生れて終局目的の理性に適せざるものは不合格として捨てらる。かゝる人類はいかに幸福なる生活なりとも、ただ地殼の發達を齎する生物に過ぎず、人は世界の最深の意義目的をさとり、目的ある世界として自己の心靈を開發し社會に客觀的淨土を建設す

の一員として全力をつくし、相互 策勵し正義の悪をすて善を選び世界をして理想の淨土たらしめ人類をして菩薩聖衆たらしめ、

經に諸の菩薩常に正法を宣ぶ。智慧に隨順して違ふことなく失ふことなくすべて萬物に於て我所の心なく染著の心なく去來進止情に係る處なく意に隨て自在にして適莫することなく彼もなく我もなく競もなく訟ることなく諸の衆生に於て大慈悲饒益の心を得たり等。

現世界は如來の正義の幡をたてて我と及び世界の動機より起る煩惱賊と健闘し念念進歩し歩々向上し目的に歸趣すべき方便土として力行して止みなむ。

現世界は成しうべきかぎり教多の聖賢を出し靈的生活の人を造り出して方便土の性を遂げたるものと云つべし。

是如來の正義に努力したる世界なり。是如來宇宙大道に正義の勢能を以て世界に與へたる理法なり。

神聖態

金剛自性光明 遍照の清淨不壞種々業用と方便加持を以て金剛乘を演ぜ唯一の全剛能く煩惱を斷つと乃至五智光照常に三世に住して暫くも怠むこと有となし。

是如來は金剛自性の光明は即ち真理、真理はいかなるもの爲にも破壊されざる處なり。如來真理の智光は神聖なり是神聖の光能く衆生の心靈を照臨して如實の道に乘して菩提を得しむ。

神聖態

宗教一切道徳律の根底とし自己心靈の爲に光明を興える根底中心として如來は神聖態と見ゆ。人は心靈開發、如來の中の自己としては道徳秩序の神聖なり。

如來の神聖は絶對的真理にして絶對的道徳の中心なり。是一切道徳律の一大原則にして無上權理を以て萬法を統治し一切を規定し命令する理性なり。

神聖は道徳を普遍的に約束する命令性なり。真理は普遍的なれば自己のみにあらす、凡てのものを約束す。

如來神聖は真理にして何人も拒むべからざる徳性なり。絶對真理にあらざれば普遍的に行はれ無條件に一切を規定することなかるべし。神聖は無上の權ありて侵すべからざる光を以て道徳を自律に制裁するのみにあらず、また一切心靈の根底にして一切心靈を統一攝理する處の理性、神聖の光明によりてすべての心靈を向上し如實の軌道に則らしめて終局目的に歸趣せしむ。如來の神聖は個人の心靈に眞實即至誠心として現す。

形式と目的

世界的動機と個人中心としての道徳には形式論的に良心の命令による義務の觀念より出づる行為の結果のいかに拘らず、すべて善なりといふ形式論と、また行為の結果より割出す目的論的主義とは道徳意識の標準を異にするも、相待規定を越たる絶對的真理なる如來の神聖の命令として吾人の心靈に湧き起る形式即ち心靈は、道徳の司導者にして之に隨ふ行為の結果は終局目的に協ふて無上菩提に到達す。形式と目的と一致す、故に如來の目的は進化に努力して止まず、是眞善美の終局に向ふ目的なり、この目的に達すべき大道を照すの光明は神聖にして人の心靈に命令す。斯命令に順ふ心靈の向ふ處は必ず畢竟して如來の目的に參る。自律的に道徳の標準に隨ふ、如來の目的を以て自己の目的とすればなり。

故に如來の神聖による心靈の道徳的行為は形式と目的と自ら一致す。

自律と他律

宗教に道徳秩序の根底とし道徳の制裁につきて文化の階級によりて自律なると他律を要するものとあり。

人が世界因果の支配の下に立ち、絶對なる如來によりて直接に道德の規定とならざるものためには、他律を要す。或は舊約の十戒の如きまた佛教の八天教に五戒十善あり、また小乘の戒律等各條件を以て道德を制裁す。其の律法を犯すものには某の報あり等。また其の律を犯すものは神の怒りに觸れて相當せる罰ありと。故に某々の條件を守るべしとの如きは、條件を以て他に約束せらるるが故に他律と云ふ。此他律に相應する處の宗教的意識には、條件の律法が無上の權を有し神聖にして侵すべからざるものとす。進んで世界規定を超えて如來の一大真我の中に生活する處の心靈には、必しも他律を要せざるなり。

如來の絶對的真理の光明を以て人の心靈に儼臨し之によりて自己を返照し、心靈を神の聲として其標準に順ふて自ら無條件に道德を制裁す。

自己胸中の神聖の聲は、すべての惡を遮して諸の善に進ましむ。自己と云ふは一大真我よりこの心靈に輝き來るもの如來の聖意と一致するが故に自ら道德律に相應す。

經に、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教と。

自淨其意とは是自律的道德、この自なるものは一切諸佛と同一の根底なり。此神聖の聲に應せざるものは真理に乖くが故に無明の地獄に墮す。終局目的に交ること能はず。

如來より出づる心靈は自律的に真理に順ふべく、起信に法性の體は無慳貪なるを知らるが故に隨順して施を行ふ。法性無染にして五欲の過を離るるが故に隨順して尸羅を行ふ等。

心靈は自律に道德を立るのみにあらず、また自から其規律の標準に隨ふ神聖の命令の下に行動す。

如來の神聖が吾人の心靈を通して自己の一切の意志を支配する、絶對より自己に湧出るが故に實は自他を超絶したる道德律なり。

意識には宇宙心靈即ち如來の神聖態を純朴なる天然の人は之を天命と云ふ。即ち天とは蒼天に一種の眞理ありと認めて世界人類の生死禍福も是上帝の命令とし天命は侵すべからざるものと信す。是等は天則の理法の方面のみを知るのみ。天とは一大心靈即ち三身一如の如來身なりと唱ふる如き高尚なる理に於ては未だ明めざる處なり。

主觀的正義

心靈本務の形而上根底

如來の絶對的聖意が一切の主觀的に實現して正知見の命令に本務を果すべき性能なり。

如來の正義に隨ふとは吾人は消極的には聖意に適せざる主我を排除し、積極には聖意實現的に行動すべき性能なり。

正義としては、吾人は自己に潜伏せる靈性を開展し、如實に本務を果すべき性格及び行為を以てまた自己の生命を向上すべき責任を有す。

主觀的正義は如來の眞理の光により正知見より心靈的衝動が本務を果さんとする勢力なり。

主觀的正義は肉我衝動即ち一切煩惱を排除し靈我衝動よりの行為を正義とす。消極には主我及び主我より出づる肉慾我欲等を犠牲にし、積極には如來の目的に協力し實行す。正義とし無上道に進趣する過程に於て善惡邪正を如實に裁判し如理の判決を下す。

人の一切の不正の根本は主我なり。我なる主人已に心靈に服従する時は之に屬する我意の慾望不正の意志等は自ら降伏せざるを得ず。

如來の正義は選擇本願力として一切の人類に命す。

本願力とは聖意が一切を開展し如來の目的に隨順する者を攝取して無上道に歸趣せしむべき勢力なり。本願力は選擇の理性なり。聖意の目的に歸するものは之を攝取し然らざる者は捨てられざるを得ず。

吾人が一心を如來に投歸するに如來に適するものは心盡なり。機軸我は因果に規定せられ如來の目的に適せざるものとして捨てらる。

我の意を自力とし如來の聖意に適合する一心を他力と名づけたり。故に我意即ち自力をもては本願方に攝取せらるることなし。我意を如來に歸命すれば遣る處は心靈のみ。此心靈は聖意に合一す。之によりて自ら如來の眞我に參與し聖の目的にしたがふ。

如來の聖意に歸一したるが故に正義なり。聖意の司導の下に立ちて正義の旗をあげ我意と健闘す。道德秩序の中に正しき判決をなす。

我意は己が幸福より利害得失を根據として行爲を命ずるが故に眞理の標準に拘はらず。

如來の聖意が個人現としての正義の裁判は公平無私なり。吾人が正善の行爲には自ら満足の賞あり。不正の行爲には苦悶の罰を感ず。正義としての善惡共に因果律が時々心に賞罰免るること能はず。終局の判決孰か免るものあらん。若し心靈の賞罰を感ぜざるもの如きは已に正義なる人道より墮落したる漢なり。

正義の積極的方面は如來より賦せられたる自己の伏能を充分に發展し靈能を實行し本務をつくすなり。即ち向上し進化した聖意の實現に力行するにあり。

聖子たる天職を果すべき本務たる克己勤勉忍耐剛毅等を以て自己の伏能を發達し後にはいかなることに對しても安忍することを。

如來の聖意實現としての正義なる本務を果さんが爲にいかなる艱難をも忍ぶ時は、務に慣れつひに困苦を感ぜざるに至る。聖意に協力する勤には快樂あり勇氣あり。

導師曰く眞實心中に自他の諸惡及び穢惡を制捨し眞實心中に自他凡聖の善を勤修すべし。又云く、一心に唯佛語を信じて身命を顧みず、決定して依行せよ、佛の捨てしめ玉ふものは即ち捨て、佛の行せしめ玉ふものは即ち行じ佛の去らしめ玉ふものをば即ち去れ。是を佛敎に隨順し佛意に隨順し是を佛願に隨順すと名づく。之を眞の佛弟

子と名づく。

是如來の聖意實現の意志なり。

恩 寵

宗教意識には如來は吾人の意識に對して恩寵なり。

恩寵に方便と目的とあり。方便として、自然界は法身の一切智能によりて生産擔保せられたる萬物なれば、本より汎神論は宇宙には天地を開展し萬物を化育し勢力にも本如來屬性の内在なれば世に所謂天の恩恵と云ふ、この勢力によりて此自然界は擔保せらるるものとすれば、天の恩恵また如來の恩寵に外ならず。宇宙萬有一として如來の體相用を離れたる一物もなければなり。唯自然界は高等なる目的ある處の方便土と見るときは殊に自然界を維持する勢力に對してはことに恩寵の感深し。

まして生滅轉變因果規定の生滅世界より絶對無限の永恒なる如來の中に攝取せらるる性能に對してはことに恩寵の感なるべからず。

恩寵に方便と目的との二方面

如來は宇宙萬有に存在し自然界の萬物悉く如來の一切知能の發現なりとすれば、萬有の生存は高等なる目的ある方便の世界なり。

如來は無限の勢力をもて一切の生命を保存し天地萬物と現化し日月星宿を化育しまた萬有には自發的に發展すべき性能を存在するは、如來内在の萬物とし宇宙は調和と調階をもて萬物を化育す。

太陽の力地球萬物を化育し地上の萬物悉く如來の發現にして吾人が生命を保存すべき萬物なれば太陽の光熱より地上の植物の野に繁へる花苑に香ふ草なにかは恩恵の化現ならざらむ。

吾能力を以て萬物を化育し吾人を生存せしむ。天地萬物一として恩寵の充ざる處な

し。
吾人此生を棄くるに哀々たる父母の恩を感ず。父母にはまた父母祖先より生物原始の源に溯り祖先及び原始生物は犠牲的に其任務を盡して乃至現在の吾人に至るとすれば、すべての生命として皆終局目的に對する手段として天職を盡し乃至吾人に到ることもまた萬有に内存の如來の勢力として、萬物は法身如來の知能によりて造化せられ吾人を生息せしめ向上發達させんが爲なり。

宇宙最深の意義を宗教的意識として觀するときは萬物の中に如來の恩寵を認めざる處なし。汎神論的の佛教に四恩を説く、また天地草木等の恩を説くは萬有に如來の性能を存在せる理と、また目的に達すべき方便としての生存に對し、惠を受ざるを得ず。恩寵なりと云はざるべからず。

終局目的としての恩寵

天則秩序に世界萬有を生育し生物の生命を向上しつひに精神生活にす、まじめしは終局目的に攝取し靈化せんが爲なり。

如來はことに深遠にして高妙なる性能として、吾人はこれに對して天則の中によりは一層深く恩寵を感ぜざるを得ず。

吾人が天則によりての生存は相対に規定せられ生理に制限せられ自己の意志に満足を與へ理想を滿しむるに足らず。心靈無限の苦悶は終局目的の理性によりて解脱することを得ればなり。此によりて高等なる宗教意識の爲には目的としての如來は無限の恩寵なり。

因果規定の相待生滅の中より絶對無限の靈界に攝取する理性とし、亡びたるに回復の壽を與へ、闇黒の中に無限の光を得るればなり。即ち目的に攝取せんが爲に心靈を開發し聖種を増長せしめんが爲の啓示と解脱と靈化の恩寵として實現し來るなり。法身を根底とする生命なれば本より靈性具するも之を開發し靈化するの契機によ

らざれば目的を達する能はざればなり。

衆生はいかにして解脱を得べきぞ

起信論に、眞如は本一なれども無明煩惱ありて差別す（生と佛と）、之を解脱するに佛法に因あり縁あり具足して乃ち成辨す。喻へば木の中に火性あり、是火の正因なり。若し人知ることなく方便を假らずしてよく自ら木を燒くと云是理りあることなし。衆生亦然り。正因薰習の力ありと雖も若し諸佛善知識に遇ふの縁なくして自ら煩惱を斷じ涅槃に入るとは是理りあることなし。乃至因縁具足し諸佛菩薩の慈悲願力に保護せらるるが故に、志を發し善を修して涅槃に向ふと。

文の中に因とは佛性を根底としまた自己の遺傳に恩寵として本能に豫備を造れり。然れども夫のみにして人は自ら開發することなし。

法界流布即ち世界に流行せる人類の中に含蓄せる佛法によりて如實修行の動機即ち縁となり進んでは、直觀的に如來の客體としての如來の恩寵によりて因縁感應によりて恩寵開發し終局目的に參與することを得。

恩寵三種——三緣慈

如來の恩寵即ち無縁の慈悲は法界に遍滿して之に接觸するものとして解脱靈化の益を被らざるなし。

しかるに宗教意識の階級によりて恩寵に接するに直接と間接なりとあり。之を三緣慈と名づく。三緣慈と云ふも法相家と天台家とに於て解釋の異あると同じく、いまま同じからず。

無縁慈

如來の恩寵一切慈と能との勢力として法界に周徧し、之に觸るるものは心靈開發し

解脱靈化せざるものなし。即ち三徳の光明普く一切處に遍照し譬へば太陽の光熱化學線のよく物體を照すが如く、如來の三徳光明は普く心靈界を照す。心の智力には啓示とし光線の如くに佛界を知見せしむ。心情には熱の如く慈悲よく融合し苦を抜き樂を與ふ。意志は化學線の如く人の惡を轉じて正善に靈化す。斯恩寵本然として存在し過去一切諸佛之によりて正覺を成し現在一切聖者此によりて知見を與へられ未來一切の賢聖之によりて解脱せらる。是恩寵一切聖賢の父母なり。また心靈界の太陽なり。聖者の生命なり。心靈の糧なり。其味宇宙と共に無限なり。是宇宙萬有の父母なり。萬物此恩寵によりて化育す。一切聖者は之によりて生活す。

一切諸佛の父母たるのみにあらず、恩寵一切處に遍在して靈界の光となり壽となりて心靈に開展せるものは、常に此中に安立し糧となす。

恩寵は如來の慧と能として萬有中に存在し内にあらず外にあらず、唯心靈にのみ直接に觸るるものなり。

聖典に、如來以無緣慈攝衆生と。如來無緣慈は永恆一切處に徧在すれども、心未開の衆生は直接に恩寵に感觸して親しく緣すること能はず。是によりて此恩寵より報應及び菩薩聖賢の身を示現して一切を救靈す。ここに第二の法緣慈となる。

法緣慈

無緣慈は絶對無限常然自爾の性能にして心靈開發せる聖者はこの靈能によりて心靈生活す。然るに世界因果生滅に規定せられたる天然の人は親しく緣すること能はず。故に如來本佛より方便法身を示現す。これに三身あり。一、救主。本佛の恩寵を代表し權化として衆生を救靈す。二、教主。各々の世界に人格を以て衆生を教化誘導す。前者に因果二位を示す。因を法縁と曰ひ、大願大行をもて衆生一子の無限の慈悲を表す。果を十劫正覺の阿彌陀と號し、無限の光と無限の壽との報身とし、本佛と一體

一如なることを示し、已に果位としては始本不二なり。極樂は無爲涅槃界、造作を離れ因果を超えたり。然れども一たび迷ひたる衆生をして感じ易からしめんが爲に始成の門を開く。已に門より入りぬれば本覺眞如の都なり。

若は因若は果、悉く如來恩寵の顯現ならざるはなし。次に教主釋尊。五濁に出で無盡の慈悲をもて人民を教化すと、また六方恒沙の世界あり。諸の佛陀各其國に於て教主の本願力を稱讃して衆生を開化す。

一切諸の佛陀及びもろもろの聖賢は、本佛如來の一大恩寵より、方便法身として世に出で衆生を教化す。或はキリスの贖罪と顯はれ、マホメットの劍の救と現はれ、達磨の西來意、善導の勸化とし、永恆本然の如來の本有の慧能は、性相常然として法界に周徧するも、相待規定の世界の衆生には、之を直接に感知すること能はず、之が爲に方便法身を現じて其時機に應じて教化を垂れ、法方便宜を以て衆生を救濟するの契機を與へたまふ。かゝる契機によらずして直ちに絶對の無緣の慈に接すること能はず、この契機によりて一切の衆生に救濟の便宜を與ふ故に法緣慈と云ふ。

法緣の慈とは一宗教の教祖等の、世界に於て救濟主とすまた民族のために教祖と崇められ宗教としての神を代表せるもの、人格を以て恩寵の權化とし一慈の下に人類を救靈せんが爲に契機として遣はされしなれば此らの恩寵の化現を第一法緣の慈とす。

衆生緣慈

第三衆生緣とは、如來無限の恩寵に、法緣の慈悲たる教祖教主として世界に現じ、それよりは民族的宗教の個人を聚合せる團體の中に含蓄し、各個人の心機に恩寵が存在し、宗教意識に存在して個人若しくは家族の愛として現はれたる善知識の心機に宿れる聖靈とし、元よりは發動してそれに接觸せる人を感する愛火と現はる。起信論

の差別縁に相當す。或は眷屬父母恩愛の中に流出する如來の恩寵、あたかなる母の家庭の中に子を養ふが中にも、師友の間には熱心なる愛火に接近する同化力と現はれる等、如來の無限なる恩寵の天空の中にありて已に心靈の開發する時は、常に無限の泉源より個人の心に現する愛、父の胸中に充る愛が子に對する家庭の知識となりて愛化する如き、社會に於て相互に愛の眼を以て相視慈心を以て相接する如き、すべての個人の中に存在し而して相互の中に相愛親和の力となるは衆生緣の慈と名づく。

無縁の慈は本佛如來の本然の恩寵一切慈と能との性能として存在し、之に觸るるものを解脱靈化せしむる一大元素なり。之によりて一切心靈生命を保持す。第二法縁慈は第一恩寵より世界人類或は民族の救主教主として化現する人格現顯、一般人類の爲に救度の契機として恩寵の權化を現す。第三は個人及び家族等の師友善知識としてまた相互の相愛となりて現はるる如きを云ふ。

三縁は其縁する處に隨つて大小とまた直接間接とを異にすと雖も、本一大恩寵が各方面を異にして現はるるものにして本質に於て別るるにあらす。

絶對的實在と佛陀きた神子としての權現と機能中に含蓄顯現との異なり。

知識の恩。第三と第二とは人格を要することは、世界の生理機能の人類には、直ちに無縁の恩寵に親縁すべきものにあらず、必ず第三また第二の媒介によらざるべからざることは、恰も小兒が生ると共に植物または肉類をとりて榮養として之を消化するの力なし。必ず母の乳によりて養はると同じく、已に信心成熟せる者は、親しく如來の無縁の慈の中に啓示融合し愛化せられて靈の生活をなす。

初發心の輩は善知識の爲に愛化せらる。

善知識に充たさるる恩寵によりて同化せらる。または權化が贖罪の苦難によりて吾人は罪惡の中より救濟せらる。之を信じてまたは親善知識教父に受つゝある恩寵によりて自己の救濟を仰ぐが如きは、信仰の嬰兒として未だ如來の中の獨立の生活にいたらざりしものと云べし。

已に信心成熟する時は如來の無縁恩寵によりて靈の生活にいたるべきものとす。

三徳の連絡

無碍光は無上道徳徳。解脱靈化の徳性として宇宙心靈に含蓄し即ち一切慈と能との性能にして一切を終局目的に攝取する势能なり。

客觀的正義としては絶對理性の勢力、道徳的秩序の原動力なり。惡は却けられ善は榮ふべき選擇的理性を有し、神聖は如來の理性即ち智慧の光にして一切の势能を照す。恩寵は同じく一切慈と一切能にして闇黒の中に光を與へ、亡びたるより復活を與ふる势能なり。

神聖は智慧の光一切の宗教意識に正知見を與へ正義は智慧の能力として一切の聖意の實現的に行動せしむる元動力なり。

正義は聖意に適せざるものを捨て、目的に協力するものを攝取す。故に恩寵に攝せらる。恩寵によりて心靈開發し已に靈性を回復せらる、靈性回復するが故に神聖の光の中に自律道徳として制裁す。自律は如理の智によりて正義としての本務を果さしむ。

本務を果せば如來の目的に隨ふ故に恩寵加はる。恩寵加はるが故に之に對して本務を盡す。三者同じく如來の聖意にして相互に關聯して相離れず。相助けて無上道を成せしむ。またすべての心靈をして如來の中に道徳的自由を得せしむ。

大正十三年十一月十日印刷同月二十三日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢 年十二冊貳圓

編輯兼發行人 山崎 辨 成

印刷人 東京市小石川區表町一〇八番地 中橋 昌平

發行所 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社 振替東京六六八五一番

ミオヤの光（辨栄聖者御遺稿） 第一卷

平成元年二月一日発行

発行者 田中 成

発行所 ミオヤの光社

東京都杉並区天沼二―二六―二九―二〇二

電話 〇三(三九二)六六〇八

振替口座 東京一―四一五五六二

印刷所 東進印刷工業株式会社